

「白百合列車の咲く頃に～Another Train～」 作・朱時記時

息が上がる。  
頬が上気し、体が火照る。  
熱い。  
首筋から玉のような汗が噴き出し、鎖骨を濡らす。

——このままじゃ遅刻する！

生まれて初めて瀕する危機。  
柄にもなく駅まで疾走したせいか胸の鼓動がイヤに大きく感じる。汗が伝い、冬の朝の外気に冷えた眼鏡のツルが耳をチリチリとひりつかせる。

個人的な絶望はすぐそこに迫っているのに、駅中の様子はもどかしいほどいつもと同じだ。平然とゆっくり歩く通勤客に軽い苛立ちさえ覚えてしまう。普段の自分と同様、彼らは時間に余裕を持って家を出ているだけなのに。

理不尽なのはわかっていた。

けれど千鳥格子のように往来する客達を脇目にする間に胃の底の方からどうしようもない吐き気がこみあげた。

脂汗が額で滲み、前髪はひたりと張り付いた。

追い打ちをかけるように、眼前の階段は人でギチギチに埋められている。エスカレーター設置工事のせいで階段が半分以下の幅になってしまったせいだ。

この下り階段の先にホームが待っている。

ホームルームに間に合うギリギリの電車は経験則によれば後30秒ほどで出てしまう。ヘアトニックの香り漂うサラリーマンの波をかきわけて、バタフライで泳いでいけば間に合うかもしれない。

けれど、そんなことができる女子高生はいない。

少なくとも私、有馬真琴にはできそうになかった。

「わあああああああああ！ すみませんッ！ すみませんッ！ 通してくださいッ！ 通してええええッ！」

背後で女の子の騒がしい声がした。

振り返ると黄金色の髪を振り乱したギャル風の女子高生が碎氷船のごとくサラリーマンたちをはねのけ蹴散らし、こちらへ突っ込んでくるところだった。

ギャルは私の脇をさっと駆け抜けると、間髪入れずに前方のサラリーマンをかき分け、なぎ払っていく。

それに便乗し、私は彼女の後ろへ続いた。

彼女が切り開いた隙間をジェットコースターのように駆け下り、あっという間に駅のホームへたどりつく。

停車した電車が見えた。

——あと少し。

というところでギャルが急停止した。

私は勢い余ってつんのめり、彼女の背中に顔面を激突させた。さきほどまで猛烈な勢いで前進していた彼女の体は存外小さく、私に押されてあっさり傾いた。

次の瞬間、声にならない奇怪な悲鳴とともに私たちは倒れ込んでいた。

傾く視界で電車をとらえた。

ギャルが立ち止まった時点で扉はすでに閉まっていたらしい。ホームから遠ざかり、小さくなっていくのが見えた。

「うう………！」

ドサリと地面へ倒れたはずなのに痛くない。

むしろ体の下から心地よくて柔らかな感触が伝わってくる。

見れば私はギャルに抱きつき、組み敷いていた。彼女の胸元からふんわり漂う香りがなんとも甘ったるくてうっとりしてしまう……。

しばしばやりした後、ハッとして彼女から慌てて体をどける。

「すみません！ 大丈夫ですか？」

力なく倒れている彼女へ手を伸ばす。

「あ、アタシの方こそゴメン！ 急に立ち止まっちゃって」

私の手を取り立ち上がると彼女は両手を合わせ、軽く頭を下げた。

予想外の行動に面食らう。

失礼な話かもしれないが、ギャルはこういう時「キレル」ものだと思っていた。

見た目はギャルでも案外普通の子なのかもしれない。

「あ………」

転んだ拍子に落ちたんだろう、彼女の足下に四角い何かが転がっていた。

反射的に拾い上げてソレに視線を走らせる。

彼女の学生証だった。

「………白崎ていあら、さん？」

偶然目に入ってしまった名前を読み上げる。

「ちょ！？ ちょっと、返して！」

私の手から光の早さで学生証をもぎ取ると、ていあらさんは赤らめた顔で私を睨みつけた。

「えっと、落ちてましたよ？」

つい苦笑いして、ごまかそうとする。

「わかってる。拾ってくれたのはありがたいけど………」

ていあらさんが視線を逸らす。

「………——で」

小声で何か呟いていたけれど聞き取れない。

「どうしたんですか？ 私、なにか失礼でも………？」

ていあらさんの頬が一層赤く染まる。

「………名前、恥ずかしいから。人前で呼ばないで」

うつむき気味で早口に言うと、ていあらさんは私に背を向けて早足に歩き始めた。

その仕草は小さな子供みただった。

だからそれは庇護欲とか母性本能を掻き立てられただけかもしれない。

けれど私は今までに感じたことがないほど胸の奥が締め付けられて、当たり前のように彼女の背中を追っていた。

「ちょっ、なんでついてくんの！？」

足音に気づいた彼女が怒りとも驚きともとれない強ばった表情でこちらを振り向く。

「私だけ名前を知ってしまうなんて申し訳なくて」

「え……いいよ別に」

「真琴です。星香学園の有馬真琴です」

一息に伝える。

「いや、聞いてねえし」

呆れた顔で彼女がツツコミを入れる。

「趣味は映画鑑賞。好きなジャンルはゾンビ映画。マイブームは卵かけご飯に食べるラー油を入れることです」

「だから聞いてないって。あと食べるラー油入れんのはヤバい。あれめっちゃウマだけど太るよ。マジで」

ていあさんが力の抜けたような笑いを浮かべる。

「あんた普通そうなのに変わってんね」

「よく言われます」

——それにしても、とていあさんがため息混じりに切り出す。

「——電車、行っちゃったね」

「そうですね」

「学校間に合いそう？」

「うーん。今から行っても……遅刻ですかね」

「あはは、アタシも」

乱れた髪の毛を整えながら、ていあさんが困り顔で笑う。

私もたぶん同じような顔をしていたけれど、内心どうしていいかわからなくて怖かった。なにせ初めての遅刻だ。

遅刻をして学校で気まずい雰囲気を味わうくらいなら——。

「——いっそサボっちゃいます？」

「ちょっとあんた！？ アタシがギャルだからって学校平気でサボるとか思ってない！？ 成績はともかく、こう見えて出席率はいいんだから」

心外だといわんばかりの剣幕で、ていあさんが甲高い声でまくし立てる。

「じゃ、じゃあ隣町に最近できたカフェで一緒に勉強しませんか？ あそこタピオカコーヒーが美味しいらしいですよ？ なんなら私、奢りますから」

「……！」

タピオカという言葉にていあさんがピクリと反応する。

タピオカが嫌いな女子校生など、この世にいない。

「……やっぱあんた、変わってるよ」

「よく言われます」

そんなやりとりをしている間に次の電車はやってきた。

女性専用車両に乗ろうか一瞬迷ったけれど、混んでいたのだから私たちは結局、普通車両に乗り込んだ。

この時間の電車はなぜか女性専用車両の方が混んでいることがある。あんまり意識をしたことはないけれど、それだけこの時間は女性客が多いのかもしれない。

電車に揺られながら、私は隣で吊革に掴まっているギャルの横顔を見つめた。

明るい髪、長い睫毛、リップの引かれた瑞々しい唇。

まるでおとぎ話から出てきたお姫様みたいだ。

通っている学校にはていあさんみたいなギャルはいない。そのせいか、なんだか無性に惹かれてしまう。

こうして一緒にいるだけで、自分が王子とは言わないまでも何か特別な存在になれたよう

な気さえする。

今日は勢いにまかせて話しかけてしまったけれど、またいつか会える日が来るだろうか。会えたとして、また話しかけることができるだろうか。お友達に……なってくれるだろうか。

私は直接顔を見るのが急に恥ずかしくなって、彼女の吊革に絡めた指先を眺めた。施された桜色のマニキュアはとても暖かで、そこだけ春のようだった。

(おしまい)